

オラースとカミーユ

小林 卓

1 始めに

これまでの『オラース』の上演と批評の歴史を振り返ってみると、いかにこの作品が曲解、誤解にまみれ、その真価を認められなかったかが目につく。『オラース』とは、コルネイユの中でももっとも難解な作品である。安易で、世間に広く流通した俗な解釈は、国家への自己犠牲という愛国主義と、自然なより人間的な感情や本能との相克、対立を描いたものとするのであった。この二つの態度の間で賛否が分かれたのである。一般的に言えば、戦争といった政治的に急迫した時代には、オラースが代表する愛国的献身が喝采を浴び、平和が続く安穏な時代には自然な感情に流されるヒューマンなキュリアスが好まれた。また、『オラース』が発表された当時の情勢を探ってみれば、加えてリシュリユーへの献辞からも、リシュリユーが遂行していた、うちにおいては国家主義の興隆、外には膨張と栄光の追求という政治的プログラムへのプロパガンダという意味合いを持っていたことは否定できない。こうした生まれつきの事情と、愛国主義を宣揚するパンフレットと解され易い性格から、『オラース』には、きわもの性がまわりついているのである。このことが本劇の特徴であるとともに、その真価を長く隠蔽した所以なのである。

ステグマンは、本劇について、初めてローマを題材にしたものであり、公共の利益と個人との英雄的な相克が初めて扱われ、カミーユにおいて、愛が自己献身に対立し得る理想として初めて現われたものとして^①、その種々の初物性を強調している。直前の作品で大ヒット作でもあった『ル・シッド』とくらべて様々の類似点を見いだせるものの、『オラース』がコルネイユの劇的経歴において大きな転回点であったことは誰もが認めよう。ステグマンの言葉で言えば、ローマを題材にして、公共の利益と個人との英雄的な相克が現われたこと、我々の言葉で言えばヒロイズムの出現が、決定的な点であった。『オラース』は、ヒロイズムを発見したとともに、その深さと先鋭さにおいてコルネイユ劇中でも類例のないほど際だったヒロイズムの聖典なのである。

コルネイユの批評史を振り返ると、そのヒロイズムから愛国主義の宣揚というがさつな政治的塵埃を拭いたり、ヒロイズムに歴史的、思想的、人間的な豊富な意義と含蓄を組み入れたのはごく近年に入ってからである。その先鋒として、第二次大戦中の仕事であるがベニシュー^②を挙げねばならない。彼は、17世紀の時代の環境と思潮の中にコルネイユのヒロイズムを位置づけようとした。コルネイユのヒロイズムを封建性という語で特徴づけるのだが、それはヒロイズムが起源として封建時代に遡ることと、近代国家的規範・束縛を未だ知らないアナーキーな本質を指すためであった。ベニシューにとって、ヒーローとは何物にも拘束されずにその力を発揮し、己の欲望を充足すること

によって、優越者として自己規定したものを意味する。これは、コルネイユのアカデミックな批評を席卷していたランソン⁹⁾の道徳的義務の前に自らの欲望を否定するといブルジョワの道徳的ヒーロー像を転倒したものであった。ついで、ドルト¹⁰⁾は、更に一步を進め、ヒロイズムを近代国家の誕生史の中に定置し、マルクス主義史観に立って評価を与えた。ために、封建的なヒーローと、近代国家の誕生という歴史的使命を達成しようとする王の關係に彼の分析は集中し、ヒーロー達は、結局王の支配に従属し、中央集権的王権=国家の誕生という歴史的使命に貢献することによってその封建性とアナキーを脱するとした。ペニシュのヒーロー達が誇示したアナキーな力は、歴史的、政治的機能を果たすことによって昇華され、負から正に転じた。ドルトは、ヒロイズムの政治的歴史的役割への収束に道を開いたのである。また、『オラース』に即して言えば、1952年に出たエルランの著『オラース、人間の誕生』¹¹⁾は、特筆すべき重要性を持っている。彼のコルネイユ論は神学的解釈¹²⁾とも言うべき独特のものだが、それはさておいて、ここで初めて主人公オラースの〈復権〉がなされた。それまでオラースに着せられたありとあらゆる不名誉、恥辱、罵倒が拭われた。今日では、時代の最大公約数的常識と言ってよいアカデミックなコルネイユ批評の代表格とみなされるステグマンでさえ、オラースこそ真正なヒーローである¹³⁾と認めているほどで、オラース対キュリアスという常套の図式を時代遅れにしたほど常識化した見方だが、このことは作品が発表されて300年もたった、二十世紀の半ばに始まったのである。そして、最後に挙げねばならないのは、コルネイユ批評史上、特にそのヒロイズムの分析において画期をなしたドゥブロフスキー¹⁴⁾である。彼は、ヘーゲルの〈主人と奴隷の弁証法〉を援用することによって、コルネイユのヒロイズムに哲学的内包を与え、コルネイユのヒロイズムを単に歴史的現象とするのではなく、人間存在に内在する普遍的なテーマの一つにまで高めた。彼はヘーゲルを援用した点について、ヘーゲルが流行してるからではなく、ヘーゲルがヒロイズムについて最も深い分析と理解を示したからだと弁明しているが、戦前から戦後にかけてのヘーゲルのフランス知識人に対する影響の一つの例であることは言うまでもない。『精神現象学』の仏訳が1941年、コジェヴの有名な『ヘーゲル入門』が1947年に刊行されている。〈主人と奴隷の弁証法〉は、そこで展開されている著名なトピックの一つであった。

我々は、こうしたコルネイユのヒロイズムについての近年の研究に裨益されつつ、ヒロイズムの聖典と言うべき『オラース』に、一つの新たな読みを提起しようとするものである。ドゥブロフスキーの鋭利で深い分析に大いに知的興奮をそそられたことを告白するが、単にそれを追随するものでないことを願うものである。

2 さまざまなヒロイズム

A 通俗的ヒロイズム

I 幕冒頭、サビーヌの科白で始まる。

Approuvez ma faiblesse, et souffrez ma douleur;
Elle n'est que trop juste en un si grand malheur:
Si près de voir sur soi fondre de tels orages,
L'ébranlement sied bien aux plus fermes courages
Et l'esprit le plus mâle et le moins abattu
Ne saurait sans désordre exercer sa vertu. 6
Ma constance du moins règne encor sur mes yeux: 10
Si l'on fait moins qu'un homme, on fait plus qu'une femme.
Commander à ses pleurs en cette extrémité,
C'est montrer pour le sexe, assez de fermeté.14 (下線は筆者、以下同じ)⁹⁾

vertu, fermeté, courage, constance, mâle, ferme こういった言葉が、すでにヒロイックな世界に設定されてることを示している。サビーヌを激励するコンフィダントのジュリでさへ、次のように言っている。

C'en est peut-être assez pour une **âme commune**,
Qui du moindre péril se fait une infortune;
Mais de cette **faiblesse** un grand coeur est honteux;17

grand coeurは、ヒロイズムの術語であり、âme commune, faiblesseが、その反対の語であることは言うまでもない。この時の状況に目をやれば、ローマとアルバの戦いが長く続き、ようやく山場に達しようとしているときである。つまり、戦時中という非常時におかれているので、ヒロイックな高ぶりがローマ全体を、家庭にある婦人までもを満たしている。国家の存亡をかけた危急の時に、否応なく呼び求められるもの、それがヒロイズムなのである。そして、その背景には史的イデオロギーがひかえている。再びサビーヌから引用。

Je sais que ton Etat, encor en sa naissance,
Ne saurait, sans la guerre, affermir sa puissance,
Je sais qu'il doit s'accroître, et que tes grands destins
Ne te borneront pas chez les peuples latins,
Que les dieux t'ont promis l'empire de la terre,
Et que tu n'en peux voir l'effet que par la guerre: 44

ここでは絶対王政的術語によってローマ帝国主義が定義されている。ローマは世界史的運命 grands destins(41)を担っており、地上の覇権 l'empire de la terre(43)を約束されている。そして、その実現は

聖戦 la guerre(44)によってしか期し得ない。こうした構造を持つ史的イデオロギーを世界史的イデオロギーと呼べよう。そのようなものは、絶対主義的なものを初めとして、ヘーゲル主義的世界史観、史的唯物論、我々に近いところでは皇国史観などと様々である。

このような強固な世界史的イデオロギーを背景にして、世界史的使命を達成するための聖戦を遂行するためにヒロイズムが必要とされる。こうした状況は史上ざらにあることであり、われわれが通常目にするヒロイズムとは、このようにして呼び求められた歴史的・政治的道具とされたヒロイズムなのである。まさしく、ローマに浸透しているのはそのようなヒロイズムであり、サビーヌが示したものなのである。従って、『オラース』に登場する人物はおおかれすくなかれヒロイックだといえる。ここではサビーヌのみ挙げたが、老オラース、キュリアス、カミーユもである。だが、ヒロイズムの真の開示は、主人公オラースの登場を待たねばならない。

B ヒロイズムの開示

ローマの代表戦士としてオラースが選ばれたことが知らされ、キュリアスが祝福する。そして、オラースの初めの tirade が始まる。これはヒロイズムのマニュアルと言うべきもので、真正のヒロイズムが姿を示したのである。

Mais quoique ce combat me promette un cercueil,
La gloire de ce choix m'enfle d'un juste orgueil,
Mon esprit en conçoit une mâle assurance:
J'ose espérer beaucoup de mon peu de vaillance
Et du sort envieux quels que soient les projets,
Je ne me compte point pour un de vos sujets.
Rome a trop cru de moi; mais mon âme ravie
Remplira son attente ou quittera la vie.
Qui veut mourir ou vaincre est vaincu rarement:
Ce noble désespoir périt malaisément.
Rome, quoi qu'il en soit, ne sera point sujette,
Que mes derniers soupirs n'assurent ma défaite. 388

ここにヒロイズムが明朗明快に定義づけられた。前に引用したサビーヌやジュリの俗っぽいヒロイズムとは、雲泥の差である。格調も用語も違う。gloire, orgueil, assurance, vaillance, choix, cercueil, quittera la vie, mourir ou vaincre, noble désespoir これらの語を、サビーヌの台詞と較べられたい。本物と偽物との違いである。上述の語群から、ヒロイズムにとってキーワードと言うべき二種の語を取り出そう。orgueil と、mourir ou vaincre である。ヒーローにとって orgueil とはその必然的存在様式である。ベニ

シューは、「自ずから自然を越えた存在、即ち orgueil によって存在する人間、orgueil によって並み大抵の人間よりも優越した人間」⁽¹⁰⁾ と言っているが、orgueil の拠って来る所以は、力であり、勝利である。つまり、封建的戦闘における優者がヒーローの端緒をなし、自らを優越するものと自己規定したヒーローの優越の弁証法がヒロイズムである。ベニシューの引用には、<自然を越えた> au-dessus de la nature と、<優越> orgueil が並列されている。<自然> という語は、きわめて多産的、多義的な言葉であって、その解釈は多岐に渡り、<自然> を超越しようとする投企として定義づけられるヒロイズムも、幾つもの切込み方が可能である。⁽¹¹⁾ それはともかくとして、ヒーローとは、<自然を越えた> ものであろうとすること、ヒロイズムとは、<自然> へ敵対するものであることが、規定された。

次のキーワードは、mon âme ravie remplira son attente ou quittera la vie (384) 換言すれば、mourir ou vaincre (375) である。これこそ、ヒロイズムの試金石であり、その実存的礎石なのである。『ル・シッド』で、自らが受けた恥辱を晴らすために決闘を命じたドン・ディエグは、ロドリグにむかって言う。meurs ou tue (275) これは、mourir ou vaincre と同義であるが、この句についてドゥヴロフスキーが、『精神現象学』中に展開された<主人と奴隷の弁証法>に照らし合わせた解釈をしているので紹介する。⁽¹²⁾

人間が単なる動物的存在としてあるのではなく、人間的存在であるということは、意識としての存在であるという意味である。ところで、意識としての存在とは、他の意識によってそれとして承認されることによって初めて証明される。ヘーゲル哲学の用語を用いれば、自己意識が即自かつ対自的に存在するのは、それが他の自己意識に対して即自かつ対自的に存在するときであり、また、そのように存在するが故である。換言すれば自己意識は、承認されたものとしてのみ存在する。⁽¹³⁾ つまり、他者の意識と、他者の意識による承認とが必要なのである。他者の承認を得るために、人間は、互いに必然的に争闘・対立＝「承認のための闘い」にはいる。そこで意識は自己が動物性を超越していることを示すために、動物的次元では最高の価値である生命の否定、あるいは格下げを敢行する。つまり、生命を危険に曝す、死をもものともしない。争闘は必至に死闘となる。生命のやりとりとなるのである。しかし、一般的には、この死闘は最後まで遂行されない。つまり、一方の殲滅にまで至らない。それでは、<他者の承認> が成就しないからである。この死闘のさなかで、二つの態度、振舞いが分けられる。一方は、生命をいとんで、恐怖に襲われ死の危険を回避し、自らを承認させる欲求を断念し、他者の承認の欲求を充足する受動の側にまわる。これが奴隷 Esclave である。他方恐怖を克服した者は、他者の承認を獲得して意識としての存在、充足した人間存在に昇格する。これが、主人 Maître である。このようにして、主人と奴隷が誕生し、両者は弁証法的関係にはいる。ヘーゲルに即すれば、この弁証法は最終的に奴隷の勝利に終結する。主人の勝利は一時的な見かけのものに過ぎず、奴隷は地道な忍耐強い労働によって真の自律性を獲得し、遂には主人を越える。

ベニシューやドゥヴロフスキーの分析を援用して、次のように纏めることが出来るだろう。mourir ou vaincre＝生命を賭すことは、ヒーローたることの実存的理由であり、その黄金律なのだ。ヒーローにとってこの選択肢から逃れることはできないのであって、ただヒーローでありえないものたちだけが、生命への本能に屈服して生命にしがみつ়。つまり、受動という<奴隷>の側に回る。ここで、<自然>とは人間存在の基盤をなす動物的・肉体的生命を意味し、<自然の超越>とはその生命の格

下げ、生命の至上性の切り下げを指すのである。生命を敢然と危険に曝すというヒロイズムの黄金律を受諾することによって、オラースは、彼が真正のヒーローであることを立証し、他の紛い物のヒロイズムから訣別する。

C hors de l'ordre commun

次に、アルバ側の代表戦士が知らされる。それは、オラースにとって義理の兄弟であるキュリアスであった。この後、オラースの二度目の tirade が始まる。

Le sort qui de l'honneur nous ouvre la barrière
Offre à notre constance une illustre matière;
Il épuise sa force à former un malheur
Pour mieux se mesurer avec notre valeur;
Et comme il voit en nous des âmes peu communes,
Hors de l'ordre commun il nous fait des fortunes. 436

これは、出だしの部分を引用したが、ヒロイズムの常套語 *honneur, constance, valeur* といった語の他に、*peu communes, hors de l'ordre commun* といった語が現われて、前述のヒロイズムのマニュアルに較べて一段の飛躍、高揚が感じられよう。ローマはオラースを選び、アルバはキュリアスを選んだ。これを単なる暗合とはとらずに、より高いヒロイズムへの召命とオラースは解したのであった。ドゥヴロフスキーの言葉を引用すれば、「自乗されたヒロイズム」^[44] *héroïsme au deuxième degré* である。ヒロイズムの中のヒロイズム、ヒロイズムの秘義が彼らの前に開かれた。

Combattre un ennemi pour le salut de tous

Et contre un inconnu s'exposer seul aux coups,
D'une simple vertu c'est l'effet ordinaire:
Mille déjà l'ont fait, mille pourraient le faire;
Mourir pour le pays est un si digne sort
Qu'on briguerait en foule une si belle mort;
Mais vouloir au public immoler ce qu'on aime,
S'attacher au combat contre un autre soi-même,
Attaquer un parti qui prend pour défenseur
Le frère d'une femme et l'amant d'une soeur
Et, rompant tous ces noeuds, s'armer pour la patrie
Contre un sang qu'on voudrait racheter de sa vie,

Une telle vertu n'appartenait qu'à nous;

L'éclat de son grand nom lui fait peu de jaloux

Et peu d'hommes au coeur l'ont assez imprimée

Pour oser aspirer à tant de renommée. 451

「万人の救済のために敵と戦うこと、見知らぬものと一人あいまみえること、それはただの勇気に過ぎない」(437-39)敵とは、家族や集団や社会や、あるいは国家に敵対するものであり、なんらかの公然の理由をつけられて打倒すべき相手のことである。そのような相手と戦うことは、余りにも当然すぎることでヒロイズムにとってはほんの一步を踏み出したに過ぎない。あるいは、社会的理由もなくいわば私闘において、見知らぬものと戦うことになるかも知れない。そこで怖じけるのは怯懦というべきであろう。いずれもヒロイズムといっても、初歩的なもの simple vertu(439)に過ぎない。この程度のことは、「数知れぬものがすでに行なったし、数知れぬものができることでもある」(440)あるいは、もう少し進めれば、オラースに即して評家が贅言を尽くし、今なおアクチュアリティを失わないものに、国家のため一命を捧げるといふ愛国主義がある。「国のために死ぬのは高貴な運命であり、人々は群をなして名誉の戦死を請い求めよう」(441-2)通俗的解釈に拠れば、オラースは、ローマという国家に自己を同一視して、国家への献身と化した愛国的ヒロイズムの典型的な例とみなされているが、そうした見方を、オラースはここで軽くいなしている。それは人々が「大挙して」 en foule(442)求めるヒロイズムでしかないだろう。だが、運命は最も険しく最も困難な過酷な課題、自己の分身を葬ることを命じたのだった。「愛するものを葬る」(443)「自己の分身と戦闘であいまみえる」(444)そして「わが命をもってしても購いとるだろう血族に敵対」(448)する。このようなヒロイズム telle vertu(449)は、「我々のものでしか」(449)ありえないだろうし、これほどの英雄的高み tant de renommée(452)を望むものは「ほとんどいない」 peu d'hommes(451)のであり、ヒロイズムの中のヒロイズムに達したヒーローに「挑戦するものはいない」 peu de jaloux(450)のである。このような無類の<栄光>へと召命するローマとは、凡百のヒロイズムの彼方 hors de l'ordre commun(436)に聳えるヒーローの中のヒーロー、選ばれたヒーロー達からのみなる聖なる共同体に他ならない。「ローマが私を選んだ。迷いはしない」(488)とは、聖なる共同体からの召命への全面的服従であった。

ヒーローとは、動物的価値にとっては至上のものである生命をその至上性から引きずり降ろす、つまり危険に曝す勇気によってその優越性を自他に証する存在である。だが、ひとたび獲得した優越性も、永久の有効性を所持するわけではない。それは、ロドリグの父親が身を持って体験したところである。かつての英雄も時の経過によって屈辱に沈むのである。あるいは、時の経過を待たなくても、他のヒーローが現われて再び優越性に挑んでくることもあろう。このために、ヒーローは絶えず戦って己の優越性をその都度自他に証明しなければならないことになる。こうして、優越性とは内的に競り上がりを含むのである。ヒロイズムは空間的にも時間的にも拡大しなければならない。しかし、無際限の競り上がりが可能であろうか。優越の弁証法を延長する限り、ただ一度の失敗が優越を失なわせるという脆弱さをどうすることも出来ないのである。この時空に渡る無際限の競り

上がりという悪循環から脱し、不動の自己完結したヒロイズムを見い出さんとするために、オラースはヒロイズムの上にさらなるヒロイズムを創建しようとした。オラースの企図は、<自乗されたヒロイズム>の創建を、最愛のalter egoとの決闘に敢然と立ち向かうことによって、目の眩むようなヒロイズムの高峰を目した。そのために、ヒロイックな投企の自然を制圧するという実存的礎石は、究極まで深められ、眩暈と戦慄なくして立ち向かうことの出来ない<肉親殺し>に辿り着くのである。この優れて英雄的、反自然的、非人間的<肉親殺し>という課題を果たしたとき、初めてヒロイズムは<優越の弁証法>が必然とする陥穽に捕らわれることなく、揺らぐことのない不動の自己定立を獲得する。もはや、「挑むものとてない」(449)高峰に、ヒーローは屹立する。

「愛するものを葬る」(443)「わが命をもってしても購いとりたい血族」(448)を犠牲にするといった言葉は、この場面に即して言えば明らかにキュリアスとの死闘を指しているのだが、それが字義通りに解されるべき言葉であることは、妹カミーユの殺害によって明らかになる。おそらく、オラース自身にとっても予想外のことであったろうが。

<自然を越えた>存在たらんとするヒーローは、自然という規定からの超脱を企図する。ベニシューによれば、自然とは敗北、剥奪、死を規定する。⁽⁴⁵⁾それらに抗する物理的術を人間は持たない。ために稀でヒロイックな栄光へと飛躍せねばならない。ヘーゲルの図式に従えば、内なる動物性を脱却して人間性へと飛躍・開花しようとするのである。それは、人間存在の基盤をなす自然への敵対、制圧、抹消である。そして、このような反逆の果ては、肉親殺しに帰着する。ドゥプロフスキーは言っている。「人間の自然的な出自に対する根本的な反逆、または、人間存在の始源的な受動性に対抗する意識の全面的な回復としてヒロイズムを定義するならば、論理的に言って、最高に反自然的行為である肉親殺しこそ、優れてヒロイックな行為なのである」⁽⁴⁶⁾<自然を越え>ようとするヒロイックな投企にとって、人間を圍繞する自然をなみする事こそその最良の徴であり、とりわけ、最も近くにあって最も強力な自然=出生と愛を断ち切ることが、その最高の証となるのである。こうして、最も反自然的な人情に反する<肉親殺し>こそ、すぐれて最高度にヒロイックな行為としてヒーローに立ち現われるのである。この<肉親殺し>の論理を貫徹すれば、義兄弟から血を分けた兄弟へ、更に親へと、遂には我が身たる身体への攻撃・抹消へとエスカレートするだろう。肉親殺しは母殺しに究極し、さらに自己の存在の自然的根源=身体の否定、つまり自殺にまで行き着く。ヒロイズムが自然を越えると自己規定する以上、さらにヒロイズムの秘義が、その自己規定を十全に実現しようとする決意であるならば、自然的規定からの超脱が究極には自己破壊という矛盾に帰着するのは不可避なのである。ここに悲劇が潜んでいた。

肉親殺しという反自然的行為は、もう一つ強力な絶対的な禁忌、立法への反逆という側面を持つ。この場合もまた実現不可能性にぶち当たる。不可能とは構造論的に不可能という意味であり、現実において経験された偶然的な事実によって左右されるものではない。オラースは果敢にも肉親殺しという強力な禁忌に挑戦した。タブーの人間を緊迫する強力な圧制的な力に、単身挑んだのだ。しかし、禁忌を解消することはできなかった。彼の挑戦は当然にも不発に終わった。

肉親殺しは、ヒロイズムが自己に課す特権的行為、それによってそれを通してのみヒロイズムの

完璧な自己証明は確保出来るのであった。だが、それは自己破壊に究極し、また、同時にそれは人間が存立を賭けて自己に課した聖なる禁忌の侵犯=不可能事でもあった。ところで、オラースは果敢にもこの禁忌を侵犯した。否、しようとした。ヒロイズムの前衛を自負するオラースは、ヒロイズムの自己証明の道を果てまで辿ったのである。この意味で、オラースはもう一人のオイディプスであったといえよう。しかし、タブーはオラースの侵犯によって何ら傷つけられることなくアンタッチャブルに保たれた。オラースの肉親殺しは、一回的な偶発的な事件に格下げされ肉親殺しという禁忌は、いささかの傷もつかず保たれた。侵犯は不発に終わった。それは、オラースの意図に反してヒロイズムの究極の自己証明は手に入らなかったということである。肉親殺しは指示であると同時に遮断であった。ヒロイズムのアリバイを指示しながらも、その享受は永久に遮断されているのである。

ヒロイズムは、ここで人間存在の根本的なアンビバレンツの一つにぶつかったと言わねばならない。強烈なヌミノゼであるとともに、タブーである肉親殺し。人間存在の絶対的な証でありながら、実現不可能な肉親殺し。肉親殺しとは指示であると同時に遮断であるという手に入れることの出来ない極値だったのである。このようにして、ヒロイズムは不可能事の企てであり、挫折の予感に満ちた本質的に悲劇的なものであった。オラースの tirade が醸し出す不安は、ヒロイズムが必然とする悲劇の予感であった。ここまで来て、我々はヒロイズムの根源的な投企=自然からの超脱の不可能性に思い当たるのである。ヒロイズムとは、根本的に挫折するしかない営為なのではなからうか。こうした問いを提出するのは、先走りと言うものだろう。オラースが身を持って証したのは、真正なヒロイズムが他ならぬヒロイズムの直中において、ヒロイズムの最高峰において挫折に出会うということであった。

3 カミーユ

ヒロイズムの企図が、遂には肉親殺しに凝結することを前章で論じたが、それは、劇的にはオラースとカミーユの対決=カミーユの殺害となって現われる。カミーユ殺しとは、肉親殺しという秘されたテーマの顕在、展開であり、かつ、ヒロイズムが究極的に直面しなければならない畏怖すべき課題なのであった。劇的に言えば、キュリアスとの戦闘は一つの前哨戦、腕試しであり、カミーユとの対決こそ、ヒロイズムが全力を挙げて対決しなければならない難敵であった。

カミーユについては、オラースに負けず劣らず誤解を浴びてきた。<愛に殉じた悲劇のヒロイン>というありふれたキャラクターにはめ込まれて、捨て置かれたと言ってよい。オラースの理解に尽力したエルラン⁽⁷⁾でも、カミーユに関しては理解の外にあったようだ。サビーヌは<嘆きの女>を常に演じ続け、そこから出ることも発展することも無いのに較べて、カミーユは揺れ動き、状況の変転に翻弄されるキャラクターである。また、カミーユは本劇中で、予言や夢がくだされる唯一の登場人物であり、いわば天との親縁性を持った選ばれた人物である事も注目すべきである。予言は常のごとく、いかようにも解釈される曖昧性を含んでいるが、その中に「おまえはキュリアスと結ば

れる」(197)という語があり、彼女を幸福の予感で満たす。他方、夢は血塗られた悪夢であった。夢の意味は後になって明かされるのだが、カミーユは恐怖に翻弄されるのみである。幸福の予感から恐怖のどん底まで大きな振幅でカミーユの心は揺れるのである。突然、キュリアスが彼女の目の前に現われる。

Tu fuis une bataille à tes vœux si funeste
Et ton cœur tout à moi, pour ne me perdre pas,
Dérobe à ton pays le secours de ton bras. 246
Ce n'est point à Camille à t'en mésestimer:
Plus ton amour paraît, plus elle doit aimer 250

ここでカミーユはエロスに自己を捧げた女を演じている。キュリアスが愛のために、祖国を投げ捨てて来てくれたと思い、そうしたキュリアスを非難するどころか受け入れているのである。エロスへの献身を至上の価値とみなして、国家や社会への義務をそれに劣るものとしているのだが、残念ながらキュリアスは、カミーユの価値観を共有しはしない。彼がやってきたのは、アルバとローマの間に一時休戦が成立したからに過ぎない。実は、この時約二年ぶりにカミーユと再会したキュリアスは、開口一番こう言ったのである。

J'ai cru que vous aimiez assez Rome et la gloire
Pour mépriser ma chaîne et haïr ma victoire 241

この句ほど、キュリアスのぼんくらぶりを明白に示したものはない。彼はカミーユとの愛を本気に受け取ってはいないのだ。ローマとアルバが戦争状態に入り、お互いが敵国人として分かれば消えてしまう程度の愛と思っていたのである。予言のほのめかしもあったろうが、愛の成就に希望をかけ、一喜一憂していたカミーユとは埋めようのないギャップである。さらに、オラースとキュリアスが戦うことが決って、キュリアスが戦場に出かけようとする寸前の別離の場面で、カミーユはキュリアスを戦場に行かせまいとし、戦線からの離脱、彼女との愛を選ぶよう再度求める。キュリアスの態度は、次の句に明かである。

Avant que d'être à vous, je suis à mon pays. 562

キュリアスは愛よりも祖国への献身を優先させるのだが、それは彼の確信と言うより単なるコンフォートイズムに過ぎなかった。彼の愛が習俗あるいは社会習慣の一部に過ぎなかったように、彼の愛国主義とは、祖国への義務を鼓吹する世間への盲従に過ぎない。キュリアスはオラースのごとくヒロイズムへ昇ることができなくて、命を惜しんでドゥブロフスキー流に言えば奴隷に転落したので

あるが、そうした彼が、カミーユに代表戦士の地位を他人に譲るべきだといわれると、それをはねのける。

Que je souffre à mes yeux qu'on ceigne une autre tête
Des lauriers immortels que la gloire m'apprête
Ou que tout mon pays reproche à ma vertu
Qu'il aurait triomphé si j'avais combattu
Et que sous mon amour ma valeur endormie
Couronne tant d'exploits d'une telle infamie! 556

つまりは、他人が榮譽をものにするのを見たくないという自尊心と、戦いを逃避したという非難、愛のために戦いから逃げたという恥辱を受けたくないために、これも自尊心の一形態であるが、代表戦士という名譽にしがみついたのである。一度、奴隷に墮した者は限りなく転落していくというべきか。彼の最後の言葉、

Je vais comme au supplice à cet illustre emploi,
Je maudis mille fois l'état qu'on fait de moi,
Je hais cette valeur qui fait qu'Albe m'estime;539
Je vous plains, je me plains; mais il y faut aller. 542

このように本来戦う資格のないものが、amour propreから選ばれた名譽にしがみつき、不承不承戦場に立つことによって、祖国アルバを裏切ったのである。ヒューマン?なキュリアスについては、これ以上言うこともないが、ドゥブロフスキーの厳しい断罪を引用しておこう。「疑いもなく、キュリアスにおけるヒューマンな道徳は、本質的にめめしいものである。避けられない選択を前にしての彼の嘆き、彼の苦しみは、その結果はどうであれ、カミーユの絶望的な叫び(389)、サビーヌの治らない不決断(395)、そして両者にみられる涙への誘いと同様なのである。」¹⁰⁸キュリアスは、ヒーローとして失格したのみでなく、厳格に言えばカミーユの愛に値しない男でもあった。そこに、カミーユの大きな不幸があったのである。但し、カミーユの愛がどんなものであったかも見ておく必要がある。社会的な価値よりも愛を上位におき、エロスへの献身を至上の価値とすることは一つの態度である。エロスは、自己への絶対的服従を求めるものであり、その犠牲になったものは数知れない。ところが、カミーユは愛に対して実に保守的というか体制的なのである。キュリアスに対して脱走さへ勧めたほど反社会的な彼女が、愛については父親の認可という合法性を後盾にしている。

...il(Curiace) obtint de mon père
que de ses chastes feux je serais le salaire 172

家族的、社会的、果ては国家的な秩序をも愛のために犠牲にすることを辞さないカミーユが、このように愛の家族的、社会的認知に執着するのは笑止千万といわねばならない。こうした言葉を吐くカミーユが、エロスへの献身にすべてを捧げたとはいえないのである。何よりも、彼女の愛が、カミーユの主観にとってどのようなものであったにせよ、ふさわしい相手を持たなかったのは致命的である。カミーユのエロスへの献身とは、言葉だけのものであった。彼女を愛の権化に祭り上げようとする見方は皮相的なものである。例えば、ステグマンは本論の冒頭にも引用したように、カミーユは愛に拠って立ちオラースの苛烈なヒロイズムに対抗したとしている。エロスへの献身を字義通りに捉えれば、おそるべき秩序破壊的、反社会的なものとなるはずだが、しかし安楽椅子に座したヒューマニストにとって<愛に殉ずるヒロイン>くらい嗜好に叶うものはないようである。多くの批評家がこうしたおごなりの解釈で、カミーユを曲解した。また、こうした曲解の政治的利用については後で述べる。

オラースとキュリアスが戦場にたち、戦闘を始めようとしたとき、両陣営から不平が出、こうした近い血縁のものの戦闘を認めてよいものかどうか、神意に訊ねることになる。再度、戦闘は中断されたのだが、この時サビーヌが微かな期待を抱いたのに対して、カミーユの態度は何の動揺もなく、不動のものとなっている。

Et la voix du public n'est pas toujours leur(dieux) voix,
Ils descendent bien moins dans de si bas étages
Que dans l'âme des rois, leurs vivantes images,
De qui l'indépendante et sainte autorité
Est un rayon secret de leur divinité. 846
Le ciel agit sans nous en ces événements,
Et ne les règle point dessus nos sentiments. 862

オラースとキュリアスの戦いは、人間の力でどうなるものではなく天の意志であるとカミーユは見透かしたのである。もはや幸不幸に一喜一憂するカミーユではない。天の計り知れない意志が、オラースとキュリアスの戦闘を準備した。「天は人間の感情によって出来事を計りはしない」(862)カミーユは、ここで天の意志を読みとり、感情の無力を認める明晰に達している。もっともこれが諦念に結果するのではなく、おそるべき絶望的な反抗に爆発するのであるが。この表面的には静かなカミーユの明察の裏で、恐ろしい起爆力が蓄積していたのである。

オラースとキュリアスの戦闘がオラースの勝利に終結し、今やオラースの帰還を待つのみとなっているとき、四幕4場にカミーユ一人が舞台に立ち、五十六行にわたる長い tirade がおかれている。キュリアスが彼女の制止を振り切って戦場に行った後、彼女が運命の変転に翻弄される小娘から変貌を遂げつつあったことは前述したが、この tirade でカミーユは完全に変貌した姿を見せる。反抗の

執念と化して、全身全力を挙げてオラースに襲いかからんとする憑かれた悪鬼として現われる。

Oui je lui ferai voir, par d'infailibles marques,
Qu'un véritable amour brave la main des Parques,
Et ne prend point de lois de ces cruels tyrans
Qu'un astre injurieux nous donne pour parents.
Tu blâme ma douleur, tu l'oses nommer lâche!
Impitoyable père, et par un juste effort
Je la veux rendre égale aux rigueurs de mon sort. 1202

こうしてカミーユの tirade は、始まる。最初に愛という名分を立てているが、それは単なる口実に過ぎず、カミーユ自身もこの点で混乱している。重要なのは、「死を恐れない」 brave la main des Parques (1196)の句である。死をものともしないことがヒロイズムの黄金律であることは先に示した通りであるが、皮肉にもカミーユの態度はそれに一致する。カミーユの場合は裏返されたヒロイズムとも言うべきであろう。ヒロイズムそのものではない。ここで一つの誤解を解いておきたい。それは、ドゥブロフスキーが他ならぬ<感情のヒロイズム>をカミーユに認めていることである。「あらゆる点で栄光のヒロイズムと類似しながらも、厳密に正反対のものである感情のヒロイズムをうち建てることによって」⁽⁹⁾「死の試練に曝すことによってカミーユは、感情のモラルをヒロイックなモラルに高める」⁽¹⁰⁾カミーユを愛に殉じた少女とみなすことによって、彼女が持つ毒を薄め、安全無害化して自らも安心しようという甘ったるい批評の例をステグマンにみたが、ドゥブロフスキーはそれと違うものの、カミーユをヒロイズムという地平に格上げすることによって彼女の真価を見過ごすことになったのである。カミーユは自ら進んで格下げの方向に向かった。カミーユの行く手は、無であり、なんらかの価値定立などではない。カミーユにヒロイズムという mélioratif な語を、適用するのは誤りである。

そして、残虐非道なもの ces cruels tyrans(1197)には従わないと反逆を宣言する。ces cruels tyrans とは、この文脈に即して言えば老オラースとオラースを指す。更に、老オラースが代弁者となっている国家主義、オラースが具現したヒロイズムである。ここで、カミーユの基本的な立場は明確にされた。彼女は反抗 révolte に走ったのである。運命が彼女の小さな胸に宿った感情などかまうことなくその進行を歩むことを知り、近親のものにはそむかれ、彼女が愛していると錯覚しているキュリアスにも結局は捨てられ、今や失うべき何物をも持たないカミーユは、絶望の淵からエネルギーを結集し、反抗へと向かった。「一切を失ったものに何を恐れることがあろうか」(1244)「私の苦しみを過酷な運命に見合うものにしよう」(1202)運命が過酷であればあるほど、容赦なく彼女を苦しめれば苦しめるほど、カミーユはその苦の中で反抗を養うのである。そして、それは「正しい努め」(1201)なのだ。ここでカミーユが直感した正しさとは、老オラースやオラースが言う意味のもの、即ち何らかの義に合致していることでは無論ない。それは反抗と孤独のさなかに身を置いたものが、自らに

宣じた確信、本能的な自己肯定とでも言ったものであった。

Dégénérons, mon coeur, d'un si généreux père,
Soyons indigne soeur d'un si généreux frère,
C'est gloire de passer pour un coeur abattu,
Quand la brutalité fait la haute vertu.
Eclatez, mes douleurs: à quoi bon vous contraindre?
Quand on a tout perdu, que saurait-on plus craindre?
Pour ce cruel vainqueur n'ayez point de respect,
Loin d'éviter ses yeux, croissez à son aspect,
Offensez sa victoire, irritez sa colère,
Et prenez, s'il se peut, plaisir à lui déplaire. 1248
Il vient, préparons - nous à montrer constamment
Ce que doit une amante à la mort d'un amant. 1250

dégénérons(1239)これがカミーユの長い tirade の要約なのだ。字義通り身を落とすこと、墮落することである。ヒロイズムという絢爛たる栄光から、彼女の感情の圧殺を要求する国家主義から、ローマから、都市という共同体から、さらには過酷な容赦を知らない歴史の進行からカミーユは自らの意志にしたがって墮ちたのである。その出発点になったキュリアスとの愛は、もはや単なる口実に過ぎない。キュリアスとの愛など、カミーユが墮落するエネルギーになり得なかった。カミーユに愛の権利を認めたり、感情のヒロイズムを着せたりするのは、このカミーユの墮落を無視したり、過小評価してるからである。オラスが体現するヒロイズムに、愛という別の原理を持ち出して対抗したのではない。それでは、一つの異義申し立てにしかならない。そのような次元では、二つの原理があい争うわけで、互いに相対化しあうばかりである。カミーユは自ら墮落することによって、自らを無にまで貶めることによって、いわば負の極点に位置することによって自他の相対化を拒否し、他の価値一切を呪い、否定する特権を手に入れたのである。カミーユのニヒリズムとは、価値を否定し痛罵する特権を意味するとは言え、そこから何物も建設されるものではない。彼女がヒロイズムを、国家を、運命を、天を呪い罵倒するのは、そうするだけの義を持っているからではない。愛やヒューマニズムや何やらという義に拠って、彼女は反抗しているのではないのだ。彼女自身が無であるからこそ、一切に毒を投げつけることができたのである。カミーユのように真正面から敵対するのではなく、斜めからゲリラ的に攻撃するというのは弱者の取る戦法である。こうした点で、確かにカミーユの反抗はドゥブロフスキーの言う「女の詐術」⁽⁹⁾と言える。ありていに言えば、負け犬の遠吠えである。しかし、負け犬や弱さ、墮落、といった負のものを鋭利な攻撃の武器に転ずるのが、弱者の無からの反抗なのである。tirade の最後の部分、éclatez(1243) から croissez(1246), offensez(1247), irritez(1247) と次第にクレッシェンドで、調子が高まっていく。無からの反抗は、挑戦

へ、さらには挑発にと高揚する。

Ne cherche plus ta soeur où tu l'avais laissée,
Tu ne revois en moi qu'une amante offensée
Qui, comme une furie, attachée à tes pas
Te veut incessamment reprocher son trépas.
Tigre altéré de sang, qui me défends les larmes,
Qui veux que dans sa mort je trouve encor des charmes,
Et que, jusques au ciel élevant tes exploits,
Moi-même je le tue une seconde fois!
Puissent tant de malheurs accompagner ta vie
Que tu tombes au point de me porter envie,
Et toi, bientôt souiller par quelque lâcheté
Cette gloire si chère à ta brutalité! 1294

「復讐の女神フリアエのようにまとわりついてやる」(1285)という句に、カミーユの真骨頂が出ている。もはや、論理や主張の問題ではないのだ。なりふり構わず、カミーユはオラースに食いつき、その栄光を食いちぎらねばならない。

Rome, l'unique objet de mon ressentiment!
Rome, à qui vient ton bras d'immoler mon amant!
Rome qui t'a vu naître, et que ton coeur adore!
Rome enfin que je hais parce qu'elle t'honore!
Puissent tous ses voisins ensemble conjurés
Saper ses fondements encor mal assurés! 1306

この後も、延々とローマの歴史を先取りするかのよう、ローマの壊滅を描写しつつ祈願の言葉が続く。ローマとは、本劇中では地理的歴史的な名称であるとともに、将来世界の支配者となるべく定められた運命を指し、さらにはヒーローたちの祖国、或はヒーロー達からなる聖なる共同体をも指すのであるから、このローマに対する罵倒は、カミーユの呪いと罵倒の究極的な対象であるといえる。ここで、カミーユの反抗はその究極点、不敬にまで至ったのである。

以上の劇的用意を経て、オラースとカミーユは激突する。カミーユは、オラースの剣によって葬られた。この時、オラースの述べた言葉は短いが端的に明快である。

C'est trop, ma patience à la raison fait place,

Va dedans les enfers plaindre ton Curiace! 1320

Ainsi reçoive un châtement soudain

Quiconque ose pleurer un ennemi romain! 1322

Un acte de justice,

Un semblable forfait veut un pareil supplice. 1324

ヒロイズムという観点からすれば、カミーユ殺しは *raison* であり、*acte de justice* に他ならなかった。一部の論者がみるように、感情に駆られた盲目の行為ではありえなかった。キュリアスとの戦闘からカミーユの成敗に至るまで、ヒロイズムの論理は一貫しており、より一層徹底し、高揚した。

オラーズの行為はその動機において紛れる事なくヒロイックであり、その正当性は明白であった。だが、その帰結は明快を欠き、両義的なものとなった。カミーユのなりふり構わぬ反逆は、彼女が望んだようにヒロイズムを打倒することはできなかった。ただ、ヒロイズムの内奥に潜むジレンマを赤裸に白日の下に曝す事に成功したのであった。そこで、ヒロイズムは自らの内にある挫折に直面しなければならなかったのである。同時に、ヒロイズムは外部からの批判に曝されることになる。外部とは、非英雄=大衆と、社会秩序の代表者=王とである。

4 オラーズの審判

V幕は一般にオラーズの審判 *judgement* と呼ばれている。批評家コルネイユはここでも不満を漏らし、V幕は成功していない、なぜなら弁舌に終始しているからと、彼らしい審美的な批評をしている。このような不満が出る根本的な理由は、V幕が劇的に必要なのかということが問われるからである。純粋にヒロイズムという観点に立つならば、カミーユ殺しという主要なヒロイックな行為によって本劇の *action* は尽くされたのである。キュリアスとの戦闘は、実は前奏に過ぎなかった。ヒロイズムは、カミーユ殺しによってその赤裸な姿を明らかにし、その奥義である「もう一つの自己との戦い」(443)「わが命を持っても購いとる血族」(447)を葬りさるといふ、至高の肉親殺しという課題に挑戦し、かつその挫折を露呈した。もはや残されたものは何もないはずである。このような劇的構成上のV幕の位置づけについて、不思議にもフランスの批評家は殆ど取り上げていないが、ネルソンは本劇は、カミーユ殺しの前で終わるべきものであるということを言っている。¹²⁹ 勝利者オラーズが凱旋して、老オラーズに変わって王位に就くという結末が、政治的心理的に最善だという。カミーユ殺しまで取り除いては、ヒロイズムが全く変質してしまい、ネルソンの『オラーズ』解釈自体も支持し得ないものだが、V幕が余剰、または異質であるという直観は正しいのである。

V幕で、新しい人物が登場する。王と大衆である。今まで全く姿を見せないわけではなかったが、その劇的役割は殆どなかった。ローマが勝利をおさめ、その支配が確定した瞬間、即ちヒロイズムがその難業を完遂した途端、大衆と王がのさばりではイロニーであるが、ヒロイズムは王と大衆という他者によっていわば裁かれることになる。大衆の代表ヴァレールが、オラーズを告発する。

その詳細は省略するが、オラースを審判に付したのはまず持って大衆であり、その結果ヒロイズムは、その輝かしい果実を大衆=非英雄達によって奪い去られるのである。ヒロイズムの秘義に従えば、キュリアスとの戦いからカミーユの殺害に至るまでは、一貫しており何の食い違いも飛躍もない。カミーユの殺害を罪、恥辱というならキュリアスの殺害も同然なのである。カミーユの殺害にはなんの恥辱も不名誉も罪もない。ヒロイズムは不変である。だから、オラースが審判されるいわれはない。オラースは大衆について語る。

Le peuple, qui voit tout seulement par l'écorce,
S'attache à son effet pour juger de sa force,
Il veut que ses dehors gardent un même cours,
Qu'ayant fait un miracle, elle en fasse toujours.
Après une action pleine, haute, éclatante,
Tout ce qui brille moins remplit mal attente,
Il veut qu'on soit égal en tout temps, en tous lieux,
Il n'examine point si lors on pouvait mieux,
Ni que, s'il ne voit pas sans cesse une merveille,
L'occasion est moindre, et la vertu pareille:
Son injustice accable et détruit les grands noms; 1569

物事の皮相しか見る事の出来ない大衆に、ヒロイズムを理解することも判定することもできない。オラースにとって、大衆は無視すべき対象でしかなかった。老オラースの言葉を引こう。

C'est aux rois, c'est aux grands, c'est aux esprits bien faits,
A voir la vertu pleine en ses moindres effets,
C'est d'eux seuls qu'on reçoit la véritable gloire,
Eux seuls des vrais héros assurent la mémoire. 1720

ヒロイズムを理解するのは、「王、高貴な人、志操高い人」(1717)であり、彼らのみが栄光も名声も授けることができる。ここでも、大衆は埒外におかれている。

しかし、オラースは「やくざな大衆がヒーローの名声を貶め、破壊する」(1569)事を、甘受しない訳には行かなかった。大衆=非英雄達は、ヒロイックな難業を手を拱いて傍観するしかないが、ヒーローから喝采と栄光を奪い去れるという始末の悪い観客なのだ。ここで、ドゥプロフスキーの的確な指摘を引用しよう。「老オラースが欲し、またオラース自身も自乗されたヒロイズムを打ち立てることによって、個人的には試みたように、ヒーローの共同体をそれ自身において建てることは不可能だったのである。キュリアスの勝利者、カミーユの勝利者、そして自己に打ち勝てるもの=オラー

スは、大衆の現前によってその勝利を奪われた。彼が紛れることのないヒロイズムをうち建てたと信じた瞬間、もう一人の私ではなく、**真正の他者**が、彼に対立しオラースから彼自身の行為を奪い去ったのである」²⁹即ち、<主人と奴隷の弁証法>のもう一つの解釈<自己と他者の弁証法>が働くわけである。ドゥヴロフスキーも、サルトルを援用して詳述している。²⁹自己意識の成立は、他者の現存を条件とする。ヒーローにとって真の他者とは奴隷である。排除したはずの奴隷の視線が、実はヒーローをヒーローたらしめていたわけである。ヘーゲルの図式に従えば、このように奴隷=大衆がヒロイズムを突き崩すのは必然と言うことになるが、それはあくまでも外からのヒロイズムの切り崩しに過ぎない。ヒロイズムは大衆の前に敗北したといえるが、挫折したわけではない。オラースにとっては大衆の理解など無価値なのである。彼には<選ばれた民>という観客がいればよい。即ち、アルテル・エゴであるもう一人のヒーローの認知があれば、足りるのだ。だが、オラースの留まることを知らないヒロイズムへの上昇は、ヒーローのアルテル・エゴを大衆へと転落させ、置き去りにするものであった。大衆という観客を蔑視し捨て去り、険峻なヒロイズムの高峰をよじ登って頂点に達したとき、見回せば、大衆は無論の事、同志たるヒーロー達も消え失せたのであった。オラースは、ついには誰一人の視線すらない荒涼とした砂漠に追いやられたのであった。「挑むもの」(449)のないヒロイズムの高峰は、ヒロイックな荒野に他ならなかった。ドゥヴロフスキーは言う。「オラースは孤絶する。殺害者であるとともに傷つけられたものとして、同類には裏切られ、近親といえ、呻吟しつつも凡庸な妻に、その上父親にも理解されないで」²⁹サビーヌとオラースのギャップは越えられないほど広く、このカップルはとっくに壊れているが、表向きはオラースの弁護人である老オラースでさえ、オラースの理解からは程遠い。V幕のオラースは、あらゆる人間的環界からはみ出た者の孤絶した悲痛な姿を曝すのである。それは生きようのない砂漠であり、ヒーローたる(彼は依然としてヒーローである。失墜しても墮ちてもいない)オラースに残されたのは、生の放棄=死でしかなかった。

Si bien que, pour laisser une illustre mémoire,
La mort seule aujourd'hui peut conserver ma gloire,
Encor la fallait-il sitôt que j'eus vaincu,
Puisque pour mon honneur j'ai déjà trop vécu. 1582
Et si ce que j'ai fait vaut quelque récompense,
Permettez, ô grand roi, que de ce bras vainqueur
Je m'immole à ma gloire, et non pas à ma soeur. 1594

「わが榮譽を保つのはただ死」(1580)のみであるから、「わが榮譽に殉ずる」(1594)ことを願うのである。大衆の視線がヒーローの罪を糾弾する時に、オラースがここで言う榮譽とは、もはや観客の視線では有り得ない。<栄光>を奪われたヒーローの残された自己確信、自負であった。「私は余にも生きすぎた」(1582)とは、聞くに痛ましい科白である。繰り返して論じてきたように、ヒロイズムと

は自然の超越=自己破壊だと言ったことの見事な実証だからである。自決を王に希うオラースは、悲愴、峻厳、孤独、そのものである。論理的には、オラースの自決で劇は終わるべきであろう。この場におけるオラースは、意味論的に言って自決したの等しい。オラースが死ななかつたのは、更に王の登場によって政治的加工を受けたからである。

前作『ル・シッド』でもそうであったように、政治的統合を機能とする国王が最後に現われて、ヒーローの所作に決着をつける。本劇では、審判者としてオラースを裁決する。国王テュルは、オラースが体現したヒロイズムを全面的に受け入れはしなかつたのである。もしヒロイズムが、「国王、高貴な人、志操高い人」(1717)にしか認知されないもので、その承認が必要であるとすれば、ヒーローが国王に寄せた期待は見事にテュルに裏切られたことになる。テュルは、ローマという国家の統合を第一義として、ヒーロー達がつくる選ばれた共同体、ヒロイズムの前衛ローマに属するのではない。国家と言うものは、ヒーロー達によってのみ構成されるのではない。大衆=非英雄=奴隷を必要とするのである。戦争が終結し平和が確保された今、大衆が表面に踊りだし声高にその存在を主張し始めた。国王はそれを無視することができない。国王はヒーローと大衆の宥和を、二者の国家への統合を果たさねばならない。ところで、テュルの調停を見ると、それは徹頭徹尾大衆への妥協であった。

Cette énorme action faite presque à nos yeux
Outrage la nature et blesse jusqu'aux dieux. 1734
Les moins sévères lois en ce point sont d'accord,
Et si nous les suivons, il est digne de mort. 1738

こうしてカミーユ殺しは断罪される。テュルはここで、ヒロイズムを離れ大衆にはっきりと同化したのである。そして、ヒーローたるオラースは、あたかも確信犯のような相貌を呈する。

Si d'ailleurs nous voulons regarder le coupable,
Ce crime quoique grand, énorme, inexcusable,
Vient de la même épée et part du même bras
Qui me fait aujourd'hui maître de deux Etats.
Deux sceptres en ma main, Albe à Rome asservie,
Parlent bien hautement en faveur da sa vie. 1744

とは言え、国王への貢献の故に処罰はしない。罪ではあるが罰は与えないというのは、法も論理もない、露骨な便宜主義であり、足して二で割る政治的決着である。これを政治的統合、ヒーローと大衆の宥和と称するのは、一種の詐欺みみたいなものである。彼の命を免除するとは一見ヒロイズムへのリップ・サービスのように見えるが、その実大衆へのおもねりなのである。ヒーローにとって生

命などたいした価値はなく、栄光こそヒーローの望むものに他ならないのだが、テュルは、オラースに生命を与え、栄光を奪うのである。

ところで、国王の調停について、ドルトの考えを紹介すると、彼はヒロイズムを封建的アナキーと同一視しているのだが、国王は、「極端な自己主張を国家という枠に編入し、封建的ヒーローを国家の従僕に、その支柱にする」⁽⁹⁾者であるとする。つまり、ヒロイズムは国家という共同体の枠組みに入り、そこで役割を果たすことによって、そのアナキー、或はアモラリズムを清算するのである。ドルトは続ける。「国王は、ヒーローの破壊的な栄光を歴史の中に、国家の誕生という歴史の中に編入する。国王は、国家を否定する行為の上に国家を創建する。国王はヒーローの転換を果たし、そこで破壊者は創建者となる。こうして王権は確立し、さらに一層聖化される」⁽¹⁰⁾社会秩序を否定しかねないアナキーな暴力を国家の創建という有用な歴史的役割に変換する錬金術こそ、王が果たす政治的役割であるとするドルトの見解は鋭いが、ドルトの限界はこの錬金術を手放して礼賛していることである。錬金術とは、その実、詐術であり、政治的統合という名によるヒロイズムの利用、搾取なのである。ヒロイズムからその内実を奪ったのは、大衆だけでなく国王もそうであった。オラースは一切の弁明を放棄し、王に裁決を委ねる。

A quoi bon me défendre?

Ce que vous en croyez me doit être une loi. 1538

Sire, prononcez donc, je suis prêt d'obéir, 1545

これは、王が政治的権威の最高者であることを是認したものであって、決して彼のヒロイズムが政治的役割に収束されることを是認するのではない。彼が弁明を放棄して王の裁決に委ねながらも、一種の超然とした傲岸不遜を保ち続けたのは実質的に政治的収束の拒否ととってよいだろう。王が最後にオラースに下した裁決。

Vis donc, Horace, vis, guerrier trop magnanime,

Ta vertu met ta gloire au-dessus de ton crime,

Sa chaleur généreuse a produit ton forfait,

D'une cause si belle il faut souffrir l'effet.

Vis pour servir l'Etat; vis, mais aime Valère, 1763

ここにはっきりと、ヒーローと国王の落差が現われている。「私は生きすぎた」(1582)として、「わが栄光に殉ずること」(1594)を求めているオラースに向かって、「生きよ」(1759)とは、無意味な音声に過ぎず、「国家に仕えるために生きよ」(1763)に至っては、政治的野心が馬脚を現わしたというしかない。実際、テュルの調停は劇的に心理的にぎこちない取り繕いの感を否めないのだが、ドルト自身もそう感じており、テュルに象徴的に現われた政治的統合は、オギュストにおいて完成する

と言っている。²⁸⁾しかし、オギュストが具現した政治的統合がいかにも光輝に飾られているにしても、それは、シンナのヒロイズムがオラースほどの強度を持たなかったから、ヒロイズムがたやすく政治的詐術に取り込まれたと言うべきである。ヒロイズムと政治的統合とは、決して予定調和的ではなく、統合の成功の裏にはヒロイズムの搾取が隠れている。さらに、テュルのカミーユへの扱いを見れば、政治的調停、宥和と言うものの偽瞞性が一層はっきりするだろう。王は言う。

Je la plains, et pour rendre à son sort rigoureux
Ce que peut souhaiter son esprit amoureux,
Puisqu'en même jour l'ardeur d'un même zèle
Achève le destin de son amant et d'elle,
Je veux qu'un même jour, témoin de leurs deux morts,
En un même tombeau voie enfermer leurs corps.1782

カミーユは、愛の神話中の人物に変貌されてしまった。カミーユが<愛に殉じた悲劇的ヒロイン>などではなく、国家にも体制にも呪いを吐きかけた反抗の鬼と化したことはすでに述べた通りである。だが、その呪いも毒も、テュルによって安全無害なものに変えられ、新たに誕生した国家のイデオロギーの飾りへと転換されたのである。キュリアスと共に葬られたカミーユからは、無の底からの反抗という哀切で虚無的な叫びは聞こえようがないのである。

5 終わりに

我々は、オラースとカミーユに焦点を絞って、その軌跡を辿ってきた。彼らの激突は、ヒロイズムの競り上がりの極地として必然であり、この兄弟の対決こそ『オラース』の真の action であったのだ。ところで、この対決の結果を見てみると、オラースの剣はヒロイズムの紛れもない勝利をもたらした。両者の共倒れに終わった。オラースはヒロイズムの中のヒロイズムを自他に明白に打ち建てることができなかつたし、カミーユのニヒリズムを根絶できもしなかつた。必死の無からの反抗は、それがいかなる義をも立てるものでなかつたが故に、何にも負けない一種の不死を得たのである。むしろオラースの峻厳で剣呑なヒロイズムの果てへの高揚が、カミーユの墮落を呼び起こしたのだとさへ言える。無の極から反抗に転じたエネルギーは、オラースのヒロイックな飛翔のエネルギーから養分を吸収している。確かに、オラースとカミーユは真の兄弟であったのだ。真正面から対立し敵対しながらも、この兄弟は意外に近いところにいたのである。二人の類似点は、一方はヒロイズムの極に、他方は反抗の極に、精神の強度の故に走り行き、社会的規範、秩序という枠を突出したことにあった。

そして、V幕で、新しいテーマが展開する。ヒロイズムの政治的搾取である。端的に言えば、平和が到来した瞬間ヒロイズムはお払い箱になったのである。ヒロイズムは、その政治的役割という機

能の中に封鎖され、限界づけられ、そして忘れ去られる。我々が歴史上目にするヒロイズムとは、殆どこのようなものである。本劇には際物性がつきまると始めに述べたが、それはヒロイズムが絶えずこうした政治的収奪に出会うことからくるのである。さらに、カミーユの本来利用しようのないはずの無からの反抗さえ、国王によって毒牙を抜かれ安全な飾りに変質した。このような政治的な収奪を受けたという点でも、オラースとカミーユの運命は共通していた。オラースとカミーユ、この一方を落としてはならない、この両者は形に沿う影のように、一体だからである。この両者は、若々しい強い精神的エネルギーによって、それぞれの運命を果てまで辿ったものとして、強い類似点で結ばれた兄弟であった。

ドゥプロフスキーが引用するヘーゲルの<主人と奴隷の弁証法>に即すれば、結論はとっくの昔に出ていたことになる。自然を一気にトータルに否定・超越しようとするヒロイズムは、始めから出口のない袋小路を選んだのだ。自然とは、超越されるものではなく、忍耐強い労働によって<馴化>されるものなのだ。先に述べたように、自然は英雄の反逆によってではなく、<奴隷>の労働によって徐々に撓められ人間化される質料なのだ。そこにこそ、人間が到達可能な *sapientia* が存する。確かに、理屈をつけられようであろう。しかし、劇は哲学でも理屈でもない。物わかりぶった *sapientia* に自足しようとするものは、するがよい。哲学がどの様に説こうと、ヒロイズムの中のヒロイズムを創建しようとしたオラース、そしてその影とも言うべきカミーユ、この二人が見せた悲劇的でアナーキーな相貌は、コルネイユ劇の中でも特異で強烈な印象を投げかけて忘れ難く、魅了して止まないのである。

註

- (1) Stegmann, André *L'Héroïsme cornélien* Armand Colin 1968 tome 2 p.581
- (2) Bénichou, Paul *Morales du grand siècle* Gallimard 1948 collection idées
- (3) Lanson, Gustave *Corneille* Hachette 1898
- (4) Dort, Bernard *Corneille dramaturge* L'Arche 1957,1972
- (5) Herland, Louis *Horace ou naissance de l'homme* Les éditions de Minuit 1952
- (6) Herland, Louis *Corneille par lui-même* Seuil coll. écrivains de toujours
- (7) Stegmann op. cit. p.583
- (8) Doubrovsky, Serge *Corneille et la dialectique du héros* Gallimard 1963
- (9) 引用はステグマン版による。Corneille, Pierre *Oeuvres complètes* édition par Stegmann, A. Seuil 1963 coll. L'Intégrale
- (10) Bénichou, op. cit. p.49
- (11) 神話学や深層心理学では、<自然>を太母と同定して、自我の太母からの離脱と解釈する傾向がある。cf. ランク、「英雄誕生の神話」野田倬訳 ノイマン、「意識の起源史」林道義訳

- (12) Doubrovsky, op. cit. p.92- 96
- (13) 『精神現象学』 IV - A
- (14) Doubrovsky, op. cit. p.145
- (15) Bénichou, op. cit. p.32
- (16) Doubrovsky, op. cit. p.151
- (17) cf Herland, *Horace ou naissance de l'homme*
- (18) Doubrovsky, op. cit. p.139
- (19) *ibid.* p.159
- (20) *ibid.* p.150- 60
- (21) *ibid.* p.167
- (22) Nelson, R. J. *Cornelle his heroes and their worlds* University of Pennsylvania Press 1963 p.89
- (23) Doubrovsky, op. cit. p.178
- (24) *ibid.* p.175- 78
- (25) *ibid.* p.174
- (26) Dort, op. cit. P.59
- (27) *ibid.* p.60
- (28) *ibid.* p.61